

2015/07/26 礼拝メッセージ 和智忠昭 兄

主 題：旧約に見る神の救いのご計画 V

聖書箇所：創世記9：18－11：9

創世記9：18をお開きください。

前々回、2歳になる私の孫娘あかりはお風呂から上がると、いつも体にタオルを巻いて私の懐に真っ直ぐに飛び込んで来る、こんなに幸せなことはないとお話しました。しかし、最近「じいじ、つーん」と言いながら、私の横を通り抜けて家内の方に行くようになりまして、がっかりしています。変わりやすいのは女心と秋の空、まさにこの悲哀をしみじみと味わっているきょうこのごろですけれども、変わりやすいと言えば梅雨の空です。おととい東京はかんかん照りで午後2時に気温が34℃前後に上がったかと思うと、2時半には急に曇って激しい雨が降り出し、気温も24℃前後に下がった。そして3時を過ぎるとまたからっと晴れて気温も30度を超えるような暑さになったというニュースを見ました。その雨は非常に激しくて、東横線の渋谷駅に水があふれ出して床上まで浸水し、駅員が一生懸命水をかき出していました。最近、例えば一日二日で2カ月とか3カ月分の雨が降ったとか、1カ月で1年を超える雨量があった、あるいは「観測始まって以来の記録」というニュースをよく聞きます。ノアの時代にまさにそのような出来事が起こったというのを私たちは前回学びました。

◎ これまでに学んだこと

ノアの時代、四十日四十夜大雨が降り続いた。今まで雨など降ったことのない生活を送ってきた人たちにとっては、大変なことだったと思います。神様はノアの家族に対してそれに備えて箱舟をつくるようにと言われました。ノアの家族以外は暴虐に満ち、行なうこと、考えることすべて悪いことばかりでした。だから神様は人類を滅ぼそうと考えられたと聖書は教えています。ただしノアの家族だけは救おうと考えられた。これが神様のご計画でした。

神様はご自分の形に似せてアダムを造られたと、私たちは学びました。アダムとエバ、彼らからできた子どもたちを神様は愛されました。カインが生まれ、アベルが生まれ、セツが生まれました。残念ながらカインがアベルを殺したということも既に学びました。カインは“得た”という意味の名前ですが、アダムとエバは、創世記の最初の15節で女の子孫からひとりの男の子が生まれ、サタンの頭を砕く者となると神様が約束された子どもがカインだと思ったので“得た”と名付けました。次に生まれたアベルは“息”という意味でした。神様と再び交わりができるようにと願ってつけた名前だったかもしれませんが、しかし残念ながら、カインはアベルを殺し、その代わりに生まれたのがセツです。名前の意味は“代わりに”でした。そしてアダムからカインとセツの子孫が残り、子どもたちが生まれて来たことを学んできました。ノアはセツの系列のアダムの十代目の子孫でした。

四十日四十夜の激しい雨が降り、地中から水がわき出し全世界を覆いました。箱舟は東トルコにあるアララテの山に漂着したことを聖書で見ました。そして、地の上から完全に水が取り去られ、1年が経過して、彼らは箱舟から出て新しい人生を歩みます。ノアとその家族は、神様によって救いの道を備えられたことを心から感謝し、神様の前に初めて祭壇を築いて捧げ物を捧げました。神様はその捧げ物をよしとされ、もう人類を水によっては決して滅ぼすことはしないという永遠の契約を結ばれ、そのしるしとして虹が与えられたのです。

A. ノアの失敗 創世記9：18－29

18－19節に「箱舟から出て来たノアの息子たちは、セム、ハム、ヤペテであった。ハムはカナン之父である。この三人がノアの息子で、彼らから全世界の民は分かれ出た。」と記されています。ノア夫婦から3人の子どもたちが生まれ、その3組の夫婦たちからまた子どもたちが生まれて現在に至るまで私たちはこの世界に住み続けています。このようにして箱舟から出て生活を始めたノアたち家族に一つの出来事が起きました。

1. ノアの失敗 20節

20節「さて、ノアは、ぶどう畑を作り始めた農夫であった。」とあります。ノアはいろいろなものを作ったと思いますが、その中で特にここで記されているのはぶどう畑です。そしてそのぶどう畑からできたぶどう、そのぶどうからできたお酒、「ぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。」と記されています。かなりの量のぶどう酒を飲んだに違いないのですが、とにかく大酒を飲んで寝てしまった。「裸になっ」というのは、からだに衣服をまとっていない状態という意味です。

アダムとノアのことを少し対比してみると、既に学んだように、アダムは創造の時に神の形に造られ、

ノアはアダムの形どおりの子孫であったと創世記5：3に記されています。アダムから生まれた子は神の形に似せられたけれども、アダムが罪を犯したために罪の性質を引き継ぐ者となった。だから後々アダムの形どおりの子どもが生まれて、ノアも例外ではありませんでした。神様がアダムに祝福されたことばは「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」（創世記1：28）でした。ノアには「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。」（創世記9：1）と言われた。これは人類に対する神様の祝福のことばでした。これからあなたがたはどんどん子どもたちを生んでふやして、この世界に散って行きなさいと言われたのです。

ところが失敗がありました。アダムは善悪の知識の木の実を食べた。そこで罪はひとりの人によってこの世に入った。一方ノアはぶどうの実でできた酒を飲んで酔ったのです。ノアはこのような結果を予測していたかどうかわかりませんが、意識がないほどにお酒を飲んでしまい、暑くてたまらないので、着ていたものを全部脱いでしまった。けれども、これは一つの大きな罪でした。エペソ5：18に「酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。」と記されています。ノアがしたことは放蕩ではありませんでしたが、自分の家族にある罪を犯させる原因になったのです。だからお酒に酔ってははいけないと聖書は教えているのですが、ノアは酔ってしまった。今までのことを思い起こしていただければ、ノアは正しく全き人であって、神様の言われることを忠実に、そのとおりに行なったと聖書は教えていました。こんな完全なノアでさえも、ふとした油断から罪を犯してしまう。彼はこのようにしようと、あるいは後でこんな出来事が起こることを意識したわけではありませんでした。

2. 子どもたちの対応 22-23節

1) ハム（暖かい・暑い）

でも気をつけていなかった結果、22節「カナンの父ハムは、父の裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた。」と。突然カナンという名前が出て来ますが、これは18節で「ハムはカナンの父である。」とあるのを見たとおりに、ハムの四男がカナンです。このハムとカナンの系列には共通の問題があったことをここで見るができます。三人息子の末のハムは父の裸を見て外にいるふたりの兄弟に告げたのです。

(1) 父の裸を見た

これがなぜ問題だったかという、まず「父の裸を見」たというのは注意深く見た、ただ見つめただけではなくて、非常に喜んで、見て満足したという意味があるのです。なぜ彼は満足したか、喜んだかという、神様の前に全き人であった、義人であった父、恐らくハムにも非常に厳しく生活の指導をし、厳格なおやじがお酒を飲んで酔っ払ってしまって裸になって寝ている。自分と一緒にだと喜んだと言うのです。

(2) 兄弟に告げた

それだけでなく、「ふたりの兄弟に告げた」とあります。「告げた」というのはおもしろおかしく知らせたという意味です。義人である父を物笑いの種にした。神様に従う正しい人を物笑いの種にするということは、すなわち父が信じている神様を侮辱したということにつながるわけです。「見てよ、兄さんたち。お父さんが裸で寝ている。一緒に行ってみようよ。」と。

2) セム（名前・名声）・ヤペテ（拡がる・増大する）

23節を見ると、そのことを聞いた「セムとヤペテは着物を取って、自分たちふたりの肩に掛け、うしろ向きに歩いて行って、父の裸をおおった。彼らは顔をそむけて、父の裸を見なかった。」と記されています。そのありさまは皆さんにも想像できると思います。肩にかけて後ろ向きに歩いて行って、お父さんの裸を覆ったのです。決してお父さんを見ようとはしなかった。ハムとの著しい相違点を見ることができます。

3. ノアの預言 24-27節

後でノアは酔いからさめます。そして見ると、自分が脱いだ服が下に落ちていて、新しい着物が着せかけられている。何事が起きたのか想像はつきますよね。息子たちに、どうしたんだと聞いたと思うのです。

1) ハム：呪われよカナン（ハムの四男）。兄弟たちのしもべのしもべとなれ。

「末の息子が自分にしたことを知って、言った。『のろわれよ。カナン。兄弟たちのしもべらのしもべとなれ。』また言った。『ほめたえよ。セムの神、主を。カナンは彼らのしもべとなれ。神がヤペテを広げ、セムの天幕に住まわせるように。カナンは彼らのしもべとなれ。』」（創世記9：24b-27）、このことばは、ノアが三人の息子に対して、これから彼らがどのようになって行くのかを預言したと考えられています。自分の子どもに「のろわれよ。」と言う父親があるはずはないのですが、ノアは聖霊に導かれてこう預言したというのです。

ここで、ハムではなくカナンという名前が出て来ますが、先ほど申し上げたように、父親のハムの行為がこのカナンにつながっているということを見ることができます。「兄弟たちのしもべらのしもべ」ということばの意味は並はずれたしもべ、仕えるようにと預言したというのです。どうしてこのカナンという名前が出て来たのか——。私たちは聖書の中でカナンということばを、ところどころに見ることがで

きます。神様が約束された地であるとか、あるいは性的な退廃の地となって、非常に倫理に欠けた宗教の地となったことを見ます。その象徴としてカナンの名前が挙がっています。民数記 13 : 1-2 では約束の地であるカナンが出て来ます。モーセがエジプトからイスラエルの民を率いて神様が約束された地へ出て行く時に、12人の斥候を出します。そしてその約束の地がどのような地であるかを探らせます。非常に裕福な土地で人間として住みやすいと12人の斥候は報告するのです。ただそこには非常に大きな人、巨人ネフィリムがいて攻めるにはとても難しいとモーセに報告しました。ネフィリムというのは6章で見ました。神の子と人の娘が自由に交わる状態が起きた結果、神様によって造られた人間の子孫は乱れに乱れた状況にあったということを見ました。そういう人たちが住んでいるところでした。

2) セム：ほめたたえよ。セムの神、主を。

一方セムに対して「ほめたたえよ。セムの神、主を。」、ノアはセムの信仰的なやり方を感謝したと言われています。彼とヤペテのとった態度は非常にりっぱでした。お父さんを決して見ようとはしなかった。お父さんに恥を与えようとはしなかった。だから「セムの神、主を。」と言っています。この「主」ということばは特別なことばで、当時の人たちはこのことばを知ってはいましたが、意味を理解していませんでした。出エジプト記の3章で初めてことばの意味を知ったのがモーセでしたから、それ以前の人たちはこの「主」ということばの意味を知らなかったのです。でもノアはこの預言の時にこのことばを用いました。永遠に契約を結ばれる神様がセムを祝してくださいとノアは預言したのです。やがてヘブル民族を通して、救い主が与えられ、また聖書が与えられる、これが祝福の意味です。ローマ9 : 4-5に「彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法（聖書のことばです）を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。」と記されています。アダム、セツ、ノア、またアブラハム、イサク、ヤコブ、イスラエルの父祖たちも彼らのものです。そして、それはイエス・キリストがとこしえにほめたたえられる神だからと教えています。

3) ヤペテ：神がヤペテを広げ、セムの天幕に住ませるように。

一方、ヤペテはセムと同じ行動をしました。「神がヤペテを広げ、セムの天幕に住ませるように。」と言われていますが、「広げ」ということばは交わりを持つという意味です。「天幕」というと、私たちは神様の臨在される場所を思い起こしますが、そこでともに交わりを持つことができる。新約聖書の聖書註解では十分なスペースを保つという意味だと言っていますが、やがてノアの子孫はふえていきますが、ヤペテもセムと同じように神様によって祝福された民となると言われています。

B. セム・ハム・ヤペテの歴史—民族の起源—世界のすべての人はアダム—ノアの子孫 10 : 1-32

このように三人の子どもたちはある一つの出来事によって、その将来を預言されたと見ることができます。明らかにハムの子孫たちはほかの二人とは異なっていました。

10 : 1から民族の起源、セム・ハム・ヤペテの歴史が記されています。

1. ヤペテの子孫 2-5節

2-5節にはヤペテの子孫が記されています。ヤペテの子孫は一般的にはヨーロッパまたインドそしてエーゲ海からカスピ海に分布しています。5節「これらから海沿いの国々が分かれ出て」と書いてあります。そして、「その地方により、氏族ごとに、それぞれ国々の国語があった。」と。

2. ハムの子孫 6-20節

また、ハムの子孫は6-20節に記されています。先ほど出て来たハムの四男カナンは、今イスラエル共和国があるところ、神様が約束された地カナンに住む。またクシュという息子はアフリカ大陸のエチオピア、ミツライムはエジプト、プテはリビア、そして先ほどのカナンはパレスチナと、子どもたちが各地に散らされて行きました。20節には「以上が、その氏族、その国語ごとに、その地方、その国により示したハムの子孫である。」とあります。すなわちアフリカやアジア地方です。

ハムの系列のニムロデという人、名前の意味は謀反ですけれども、彼は地上で最初の権力者となったと8節に記されています。10節「彼の王国の初めは、バベル」、バビロニア、混乱という意味の町、シヌアルというところに設立されます。アララテ山の南800キロメートルのところであり、後にシュメールと呼ばれるところです。

3. セムの子孫 21-31節

セムの子孫は21-31節に記されています。第一子エラム、バビロンの東方の高原地帯。先ほども出て来たバビロンというのは、ペルシャ湾に注ぐチグリス、ユーフラテスという二つの川のそばにできた国です。ニムロデが王として君臨した場所です。第二子のアシュルはアッシリア、二つの川の間メソポタミアの北部に分布しました。第三子のアルバクシャデはイスラエル民族と関係がある名前ですが、定住地は東の高原地帯であったと言われています。第四子ルデはルデヤ、メソポタミアです。そして第五子アラムはパレスチナの北東部、またはメソポタミア、シリアの人々、アラブ民族と言われています。

アラム語というのは後にアッシリア帝国やペルシャ帝国の公用語となりますが、聖書も古いことばはアラム語で書かれた。あるいはイスラエルの人たちはアラム語をしゃべっていたというわけです。ですからこの人たちと非常に関係があるところです。31節「以上は、それぞれ氏族、国語、地方、国ごとに示したセムの子孫である。」、このようにして人々は分布して行きました。

地図を見ると、今申し上げたような名前が出てきます。中央に地中海、大海があります。その下がアフリカ大陸で、そこには主にハムの子孫たちが分布しています。プテはリビヤ、今もリビヤという国があります。それからミツライムはナイル川のそば、エジプトです。その右上にペリシテヤカナン、今のイスラエルの国があるところです。その少し右横がバビロニア、ニムロデが王としてバビロンという国を築いたところです。

そしてヤペテの子孫たちが分布して行ったところは、地中海の一番左端、今のスペインあたりのタルシシュ、それから長靴の形をしたイタリアや今話題のギリシャのあたりがエリシャ、ヤワンです。それから黒海の周りにティラス、アシュケナズ、ゴメル、それからカスピ海の上のあたりにマゴグ、下の方にマタイ、あと少しインドの方にも移って行きますが、ヤペテの子孫たちが分布して行ったところです。

セムの子孫は、ルデ、アラムがカナンのすぐ隣です。それからバビロニアを囲むようにアシュル、マシュ、アルバクシャデ、エラムと、このように人々が分かれて行ったことを見ることができます。トルコの東の方、ちょうど黒海とカスピ海の間あたりにアララテ山があったと考えられています。ノアの家族たちはここで箱舟を出て、このようにして散って行ったのです。

C. 人の失敗 11:1-9

1. 全地は一つのことばであった。

どうしてこのように散らされて行ったのか——。創世記11:1に「全地は一つのことば、一つの話のことばであった。」とあります。箱舟から出たノアの家族たちは当然のことながら、一つの話ことばを用いていました。

2. バベルの町づくり 2-7節

ところが、2節に「そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。」とあります。先ほどニムロデのところで見えたシヌアルの地に平地を見つけて、そこに「定住した」と書いてあります。最初、人々は神様が「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。」と言われた祝福のことばを守らないで一つのところ定住して、まとまって暮らそうとしたのです。3節で彼らは言うのです。

「『さあ、れんがを作ってよく焼こう。』彼らは石の代わりにれんがを用い、粘土の代わりに瀝青を用いた。」と。町づくりを始めたのです。4節「『さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。』」と。問題点がわかりますか？神様が言われた「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。」という意思に逆らって、一つところに集まって住み、そこでれんがを作って町づくりを始めた。粘土のかわりに瀝青、今で言うアスファルトを用いて頑丈な町を建て、しかも天にまで届くような塔を作ろうと。目的は「名をあげよう。われわれが」と出てきますが、この一番の張本人がニムロデです。このバベルの町で、彼は絶大な権力を持っていました。人々の指導者でした。彼はこのようにして「名をあげよう。」と願ったのです。神に対する反逆であると考えられます。黙示録16:19にバビロンという名前が出て来ますが、「神の激しい怒り」が下る、また「大バビロン」という名前が出て来ます。神に反逆する人間勢力、また反対勢力の象徴として記されているのですが、彼らは一つの集団として生きることを選んだのです。

そして、ニムロデが死んだ後、人々はバビロンの町の最高の神としてニムロデをまつようにしたのです。最高神マルドクとして崇めるようになった。神が人の姿をとったものと呼ばれるようになったと、ニムロデは言っています。また彼自身が神になることを渴望した男だと呼ばれていました。私たちはサタンのことを思い出します。サタンは最初はすばらしい天使でした。光輝く天使、ルシファーと言いました。神のエデンに住んでいました。そのサタンが墮落したのは、神のようになろう、いと高きところに自分のいるところを作ろうとしたからです。被造物である、天使であるサタンが創造者である神に背いて自分も神のように、それ以上の存在になろうとしたと聖書は教えていました。挙句の果て彼らは天から落とされたのです。そのサタンが神がご自分の形に似せて作った人を誘惑した。「この木の実を取って食べたら死ぬと神様は言われた。でも決して死ぬことはありません。この善悪の木の実を取って食べたら、あなたがたが神のようになるといけないから神様は取って食べてはいけないと言われたのです。だから死ぬことはない。」と、アダムとエバを自分の味方に引き入れようと計画したことを学んで来ました。ニムロデも神になることを願い、サタンと意思を一つにしたということを私たちは聖書から教えられます。塔はバベルの塔と呼ばれています。その頂が天に届くようにと。実際の高さは300メートルから500メートルぐらいの間かと思いますが、天にまでは届きませんでした。それでも大

変な高さです。東京にすごい塔があります。余り大した塔ではないのですが、大阪にもあります。そういった高いところに上って行くというのは、人間の願いかもしれません。そのことによって自分の権威を人々に知ってもらうためでした。

3. 人々は主によってことばを混乱させられ、地の全面に散らされた 9節

ところが神様はそれをごらんになって、11:5-7節「そのとき主は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。主は仰せになった。『彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らがしようと思うことで、とどめられることはない。さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いにことばが通じないようにしよう。』」と考えられたというわけです。彼らがこのように町を建て、塔を建てて人間の権威を思うままにして、やがては神のようになりたいと、そういうことをするのは一つのことば、あるいは一カ所で住んでいるからだ。だからことばを混乱させようと、神様は人々のことばが通じないようにされたのです。

今までは同じことばを話していましたが、自由に意思を通じることができます。私たちは宣教師の皆さんや外国の人と自由に交わりたいと願いますけれども、英語、中国語、韓国語をしゃべるのは日本人としてはなかなか勇気が要ります。長い間、学校で英語を勉強していてもしゃべれないという残念な状況があるのを私たちは経験していますが、一つのことばだったら話せます。でも違うことばだと通じなくなる。彼らはことばを混乱させられたのです。何かしようと思っても意思が通じない。あのニムロデが幾ら命令をしようと思っても、人々はその意味を理解できない。一緒に仕事をしようとしても、それぞれが何をしたいかわからない。分担を決めることもできない。そういう混乱ができました。

8節に「こうして主は人々を、そこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。」と記されています。これ以上は無理だ。「それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。」、混乱という意味です。「主が全地のことばをそこで混乱させたから、すなわち、主が人々をそこから地の全面に散らしたからである。」と。10節で三人の子どもたちの子孫がそれぞれ全地に散らされて行ったことを見ました。あの一つの出来事によって、神様の意思が働いて人々はそのようになって行くわけです。彼らの望むところではありませんでしたが、神様が望まれたのは全地に人が散らされるということでした。

D. 新約聖書の説き明かし

新約聖書ではそのことについて次のように記されています。

1. 神のご計画

まず神様のご計画ですが、使徒17:26-27に「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。」とあります。神様がお定めになり、そうなったのです。その目的は、「これは、神を求めさせるためであって、もし探し求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。」とあります。すべての国々の人々を造り出された。今私たちは確かに人間という一つの見方をするなら、すべて同じではなく、違っています。その違いは、まずは人種の違い、皮膚や毛髪の色、鼻の形、目の色などの特徴によって区分する。民族の違い、言語や宗教、文化や歴史の共有を基盤として区分する。聖書に書かれているように氏族、共通の祖先を認め合うことで連帯感を持つ人々をひとまとめにする。聖書は、人類はひとりの人から出たと教えています。人種という区別はないと教えているのです。

確かにノアにはセム・ハム・ヤペテの三人の子どもがいました。若いころ私は大きな勘違いをしていて、セム・ハム・ヤペテ、人種が違うと思っていました。ハムは黒人種、色の黒い人、ヤペテは白人種、色の白い人、セムは黄色または褐色の色のついた人、そういう子孫の分け方でした。でも聖書的には間違った考え方でした。決して肌の色や毛髪の色、目の色、顔の形、背の高さ、骨格、そういったもので人が異なることはないのです。人間は人間です。神様は種類に従ってすべてのものをお造りになった。種が違うということはあっても、人間は一つの種ですから、別の種というのはないのです。人間同士種が違うということはありません。なぜ私たちがこのように外見上の相違があるかは、私たちにもよくわかりませんし、聖書がその答えを明らかに示しているわけではありませんが、私たちは人間として皆同じだということです。確かに国々があります。それは人間が作ったものです。ニムロデが町を建てたように、国の違いはあります。日本でも日本人と言われる人、あるいは蝦夷の人、アイヌの人たち、それから沖縄の人たち、そういった人たちがいますが、種が違うわけではない、同じ人です。アメリカでもいろいろな人たちがいますが、種が違うわけではない。だから人種の違いによって人を区別することは聖書的ではないということを教えられるわけです。

私は、黒い髪が金髪だったら、目が青かったらと思うことはありませんでしたが、そのように願う人たちがよくあります。テレビを見ていたら、髪を真っ赤や金髪、ブルーやら紫に染めている人たちがい

ます。そういうことはあったとしても、それは人工的にしていることで、決してそのようなことで他の人たちを区別することは正しくないということです。お互いに同じアダムから出た子孫として尊敬し合うことを聖書は教えています。

2. 救いの原理＝恵みによる エペソ 2 : 5

救いの原理というのを何回も学んで来ました。エペソ 2 : 5 「罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——」、エペソ 2 : 8 「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」、ローマ 5 : 21 には「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」、救いは「恵み」だと。あのノアが選ばれたのも恵みでした。神様のみこころにかなっていた。それは神の前に恵みを得たという意味であったと申し上げましたが、救われるということはすべて恵みであって、私たちひとりひとりに何の価値も原因もないということを聖書は教えています。決して行ないによるのではない。

恵みというのはただで与えられるものです。私はスーパーやデパートに行き、買うより見るのが好きなのですが、そこで一番の楽しみは試食品です。よくスーパーに行ったら試食が置いてあります。特にメロンなどが置いてあったらうれしいです。ただで食べられて、代金は取られません。これが恵みです。ところがたくさん人がいたら、やっぱり恥ずかしいので、今は食べるのはやめて後でと思って、ぐるっと一周して来たらなくなっていたということがよくあります。恵みに漏れたのです。恵みとはそういうものです。和泉市では1万円払ったら1万3千円分のチケットを買えるという割引券があります。これも並ばなければ買えないのです。でもあるだけと書いてあります。どこで売り切れになるかわからない。自分の前か後ろかもわからない。何とか手にすることができましたが、3千円得をした、これは恵みですよ。でも並ばなければ買えない。確かに救いは神様の恵みですけれども、私たちはただその恵みを待っているだけでは神様によって救われません。行ないではないけれども、行動を起こさなければいけない。恵みのゆえによるのですが、信仰というものが重要だということです。

まだ神様を信じておられない皆さんに申し上げたいと思いますが、神様はこのようにしてあなたの前に永遠のいのち、あるいはまた天の国に入ることができる恵みを置かれています。いつでもあなたが手を伸ばせばそれを手にすることができる。ところが一周回ってなくなった時のように、ある時それを取れない時が来ることも確かです。一つは私たちが死を迎える時です。死んでしまったら、信仰を持つことはできません。生きている間に決心しなければいけない。もう一つの時は神様が定められた時、やがて大きな患難時代が来ると言われています。その時、既に天に召された人たちは生き返り、空中からイエス様が迎えに来られるその時に、地上にいる救われた私たちは天に挙げられる。クリスチャンはすべて天に挙げられるという聖書の約束があり、そのことを信じています。だから、あなたもその機会を逃していただきたくはないということです。ぜひイエス・キリストをお信じになって神様からの恵み、永遠のいのち、すばらしい賜物を受け取っていただきたいと思います。

3. 悪魔は今もあなたを狙っている I ペテロ 5 : 8-9

残念なことに悪魔は今もあなたを狙っています。クリスチャンの皆さん、ノアが油断をして罪を犯したように、私たちもそのような機会が常にあるということです。I ペテロ 5 : 8-9 「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」、悪魔は敵ではありますが、味方を装って光の天使のように私たちの周りをうろついています。さも仲間であるかのように、あのエバを誘惑したように、「死にませんよ、大丈夫ですよ、取って食べなさい」と。「堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。」、既に信じている皆さんたちに、既に天に召された人たち、殉教して行った人たち、みことばを伝えていて多くの苦難患難を受けた人たち、ノアもそうです、アブラハム、イサク、ヤコブ、そういった信仰の先輩たち。アベルもそうでした。アベルは兄によって殺されました。でも彼はその信仰をよしとされ、まさに恵みを得たのです。私たちは悪魔にすきを見せてはいけません。

どうかまたこの1週間、またこの1年、神様の前に勇敢に、そして信仰に堅く立って歩んでいただきたいと思います。救われていない皆さんには先ほど申し上げましたように、ぜひきょうあなたが決心されるその機会であることを祈っております。